

高次脳機能障害に対する地域支援の実態調査報告書

居宅介護支援事業所

1. 調査の目的

高次脳機能障害に対する地域支援の実態を調査することで、今後福井県の支援体制を見直すための基礎資料とする。

2. 調査の対象

福井県ホームページ(平成29年4月現在)のリストをもとに、福井県内の居宅介護支援事業所を対象に調査。

3. 調査方法

調査対象の居宅介護支援事業所に対し、調査用紙と資料(診断基準)を郵送配布。回答はケアマネジャーへ依頼(担当者個人単位ではなく、事業所単位での回答を依頼)。郵送、FAX、メールにて回収。

<調査票の発送・回収>

・発送:平成29年5月

・回収:平成29年6月2日締切

*平成30年3月第2号被保険者の支援実態について追加調査(電話での聞き取り調査)

4. 調査内容

(1)高次脳機能障害の認知度

「知っている」・「知らない」の選択形式。

*「知っている」→(2)へ、「知らない」→アンケート終了。

(2)高次脳機能障害の方に対する支援経験

「支援経験あり」・「支援経験なし」の選択形式。「支援経験あり」の場合は今までの支援者数を記載。

*「支援経験あり」→(3)へ、「支援経験なし」→アンケート終了。

(3)支援を行った方の紹介元

複数回答形式。

(4)今まで行った支援内容

複数回答形式。

(5)支援を行う際の高次脳機能障害支援センター利用の有無

「利用した」・「利用しなかった」の選択形式。利用した目的、利用しなかった理由を記載。

(6)高次脳機能障害支援センターを利用せず、各地域単位で高次脳機能障害の方を支援する場合の問題点や課題

自由記載。

(7)介護保険サービスにつながらない場合当事者・家族へどのように関わっているのか

自由記載

追加調査

・(2)の支援経験人数総数内における第2号被保険者の人数

・第2号被保険者の支援における困り事

「困り事があった」・「困り事はなかった」の選択形式。困り事があった際にはその内容を選択形式で回答。

5. 回収率

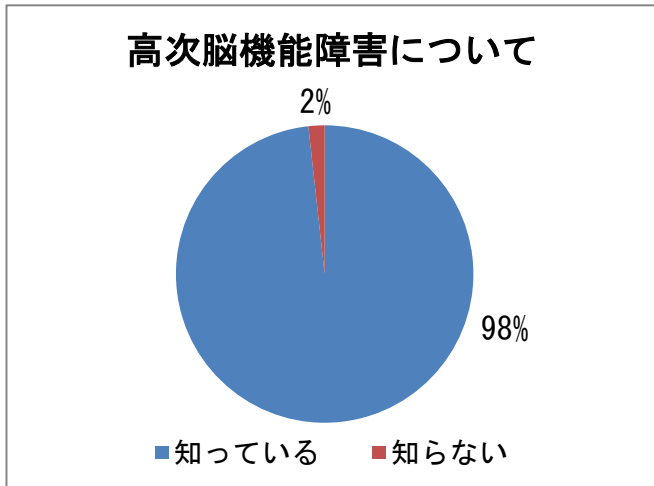
発送数	回収数	回収率
282	131	46.5%

6. 調査結果

(1)高次脳機能障害の認知度

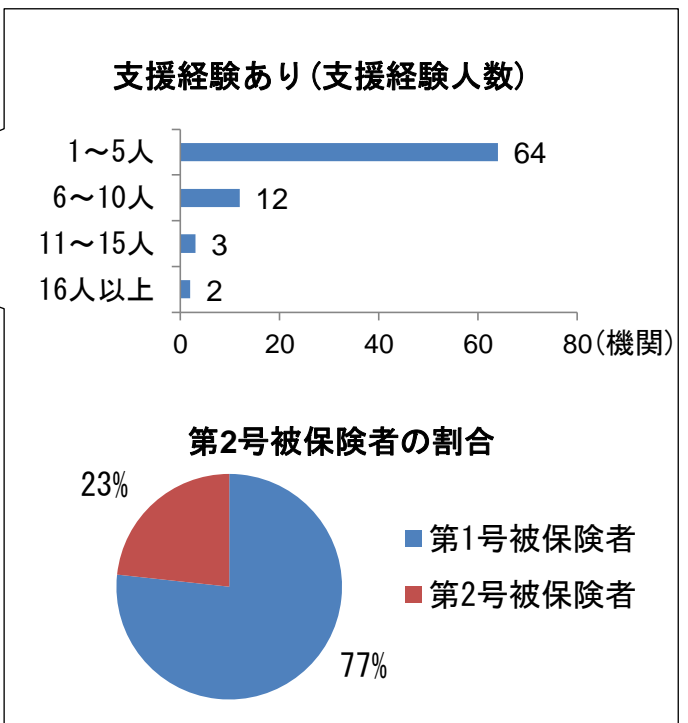
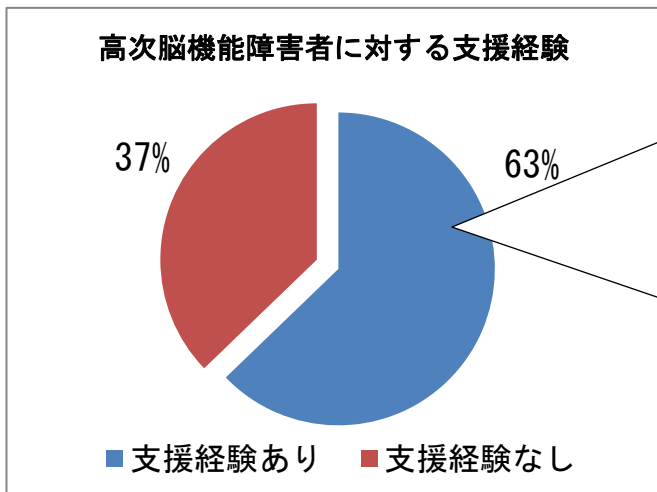
別紙送付した「高次脳機能障害診断基準」を参考に回答。
 高次脳機能障害について「知っている」もしくは「知らない」

知っている	知らない
129 機関	2 機関



(2)高次脳機能障害の方に対する支援経験(支援経験人数内における第2被保険者の割合)

支援経験あり	支援経験なし
81 機関	48 機関

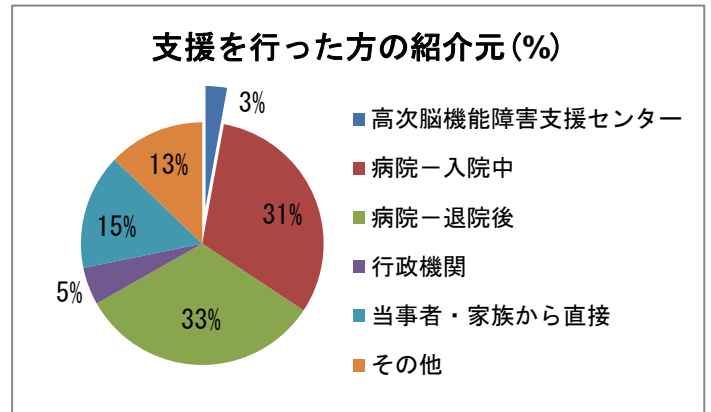
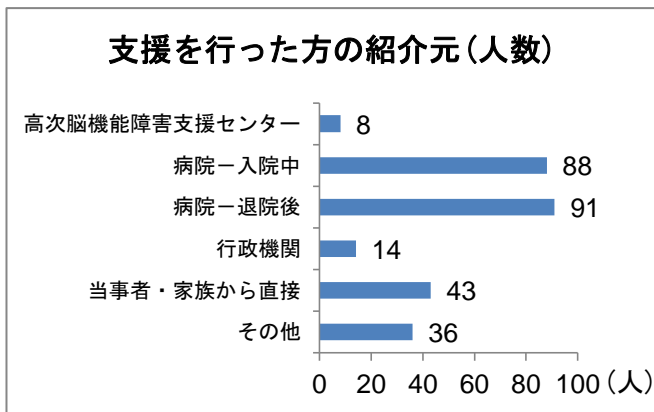


(3)支援を行った方の紹介元

高次脳機能障害支援センター	8人
病院－入院中	88人
病院－退院後	91人
行政機関	14人
当事者・家族から直接	43人
その他	36人

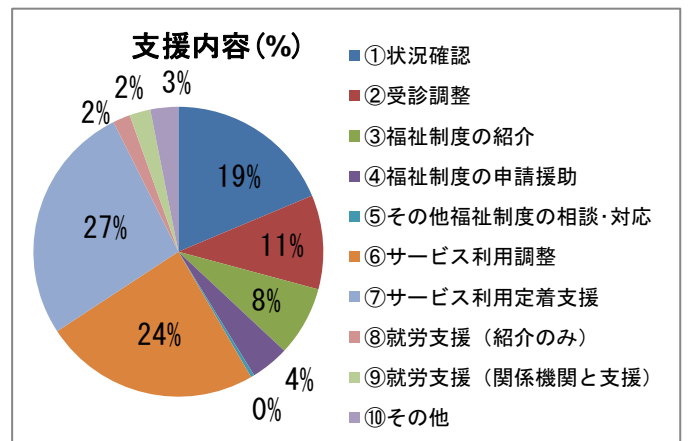
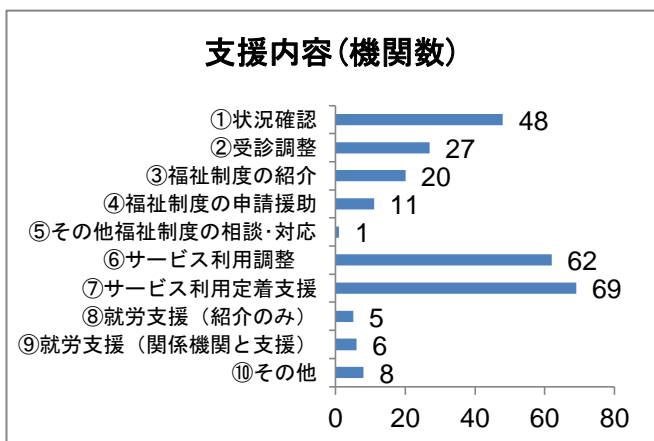
【その他 内訳】

- ・(株)ケアふくい 1人 ・包括 19人 ・オレンジホームケアクリニック 1人
- ・前任ケアマネ 6人 ・居宅介護事業所 6人 ・当ケアハウス 1人 ・不明 2名



(4)今まで行った支援内容

- ①定期的な面談・電話連絡での状況確認 ②医療機関への受診調整(診断・評価、リハビリ目的)
- ③社会福祉制度の紹介(自立支援医療・障害者手帳・障害年金)
- ④社会福祉制度の申請手続き援助(自立支援医療・障害者手帳・障害年金)
- ⑤その他社会福祉制度の相談・対応(自賠責保険・労災・傷病手当金・失業手当など)
- ⑥介護保険サービス利用までの調整 ⑦介護保険サービス調整後の定着支援
- ⑧就労支援(職業センターなど専門機関への紹介のみ)
- ⑨就労支援(職業センターなど専門機関とともに支援)
- ⑩その他(自由回答)



【その他】

- ・家族支援(妻が精神障害者)
- ・自動車運転について高次脳機能障害支援センターへ繋いだ
- ・社会参加についての促し調整
- ・高次脳機能障害支援センターの紹介
- ・行政サービス(徘徊ネットワーク、GPS)専門機関から地域医療機関への治療および介護サービスへの移行援助
- ・自立支援医療更新手続きの支援

(追加調査) 第2号被保険者の支援における困り事

困ったことはなかった	困ったことがあった
8 機関	24 機関

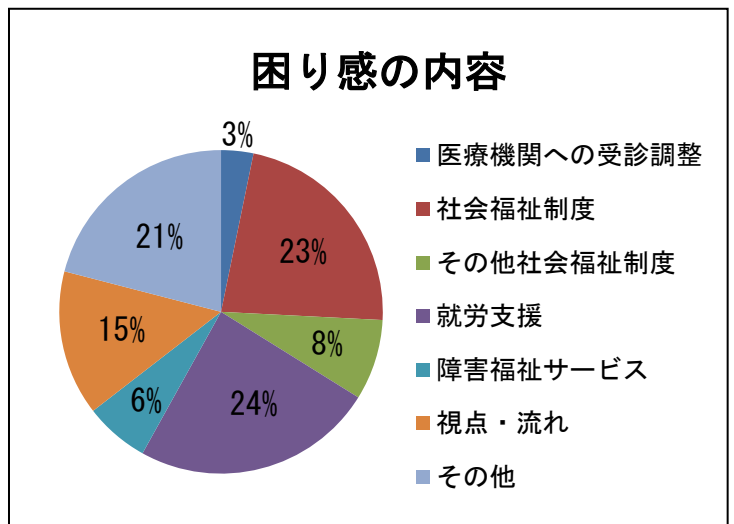
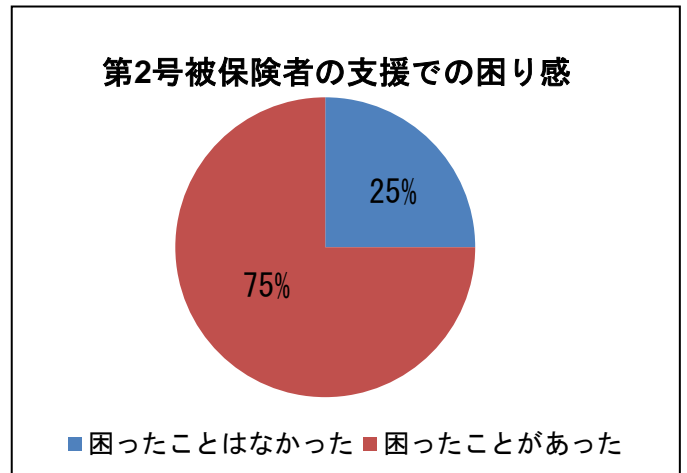
【困り感の内容】

- ①医療機関への受診調整(診断・評価、リハビリ目的)
- ②社会福祉制度の相談・対応
(自立支援医療・障害者手帳・障害年金)
- ③その他社会福祉制度の相談・対応
(自賠責保険・労災・傷病手当金・失業手当など)
- ④就労支援(連携の取り方、支援の進め方など)
- ⑤障害福祉サービス(相談支援専門員)との連携調整
- ⑥どのような視点・流れで支援を行えばよいか分からなかった
- ⑦その他

①医療機関への受診調整	2
②社会福祉制度	14
③その他社会福祉制度	5
④就労支援	15
⑤障害福祉サービス	4
⑥視点・流れ	9
⑦その他	13

<その他>

- ・本人との関わり方
- ・自動車運転について
- ・妻の考え方で本人が左右されていた
- ・当事者、家族の高次脳機能障害に対する理解の困難さ
- ・病気を受け入れにくく、本人・家族の相違が大きかった(例：入浴に困っているが、年齢的に通所には行きたくない。リハビリが受けれずに拘縮が進行してしまったなど)
- ・退院後、半年以上経ってから担当させてもらい、退院後一度就労されたが、本人・家族は就労よりリハビリが必要との思いが強かった。その時点でケアマネとしてどこに相談すべきか当時はわからなかった。時間だけが経ってしまったと感じている。
- ・20歳代前半で脳梗塞。再発を繰り返す中で一人でいることができず、常に母親が連れ歩いたケース。その受け皿としての連携先を見つけるのに困った(後に支援センターに繋がれたが…)。平成20年頃、包括で相談対応し、私自身の力不足も大きかったと記憶している。
- ・介助者のストレス。



- ・初めにデイケアを利用すると障害年金の時にややこしくなると知らずに後で困った。
- ・本人の就労意欲があり、福祉的支援を受けて就労する場合、事業所や賃金を確認すると障害受容ができずにモチベーションが下がって意欲低下してしまう。リハビリ意欲も低下してしまかなか浮上しない。
- ・障害年金に対しての知識が少なく、相談になかなか乗れなかった。
- ・在宅生活での介護者のストレスが大きく、施設入所の希望をされた。支援者として残念に思った。
- ・介護保険でサービス利用した時、通所は合わない。しかし、障害者の通所も合わない。在宅でサービス利用しようとしても、合うところがない。
- ・就労支援をするときも、本人は今までのレベルを望み、現実的に難しいこともあった。全員男性であり、就労支援は大切に難しい。
- ・医師も専門でないから相談に乗ってもらえず孤立した。

(5)支援を行う際の高次脳機能障害支援センター利用の有無

利用した	利用しなかった
16 機関	64 機関

【利用した目的】

<専門的アドバイス>

- ・より高度な支援が期待されるため。
- ・家族の方に高次脳機能障害について理解を深めていただくことが、入院治療の目的のため。
- ・担当していた利用者の家族よりの要望で自宅へ直接支援状況の整理や家族への指導に訪問していただいた。
- ・家族への高次脳機能障害に対する理解についての援助。
- ・高次脳機能障害の方に対して、どのように関われば良いのか、アドバイスをいただくために、事例検討会実施、センターの方に聞いていただいて話を聞いた。
- ・高次脳機能障害と診断を受けた利用者の家族(夫)が、どのように接したらいいのか悩んでいたため。集中力・注意散漫で、また発語が減っている事を夫がとても心配していたため。

<病院との連携>

- ・かかりつけ医が高次脳機能障害支援センターである為通院されている。
- ・主治医との連携、心身機能の評価、就労指導。
- ・退院に向けての相談窓口として利用。
- ・通院リハビリと介護サービスの調整支援内容の確認、情報共有。

<ケース会議参加>

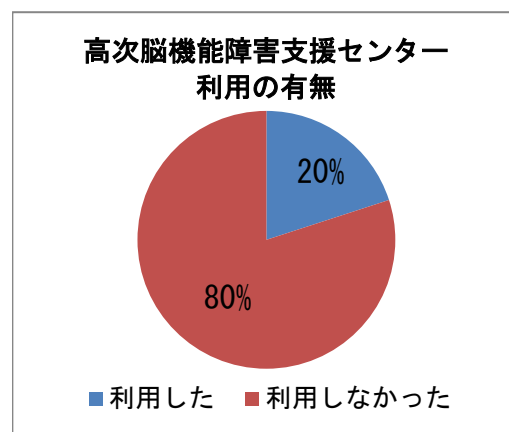
- ・担当していた利用者の家族よりの要望で自宅へ直接支援状況の整理や家族への指導に訪問していただいた。
- ・高次脳機能障害の方に対して、どのように関われば良いのか、アドバイスをいただくために、事例検討会実施、センターの方に聞いていただいて話を聞いた。

<社会福祉制度申請>

- ・就労施設への紹介のため。障害者手帳取得のため。
- ・就労支援センターへの紹介や、社会福祉制度の本人・家族への説明。

<就労支援>

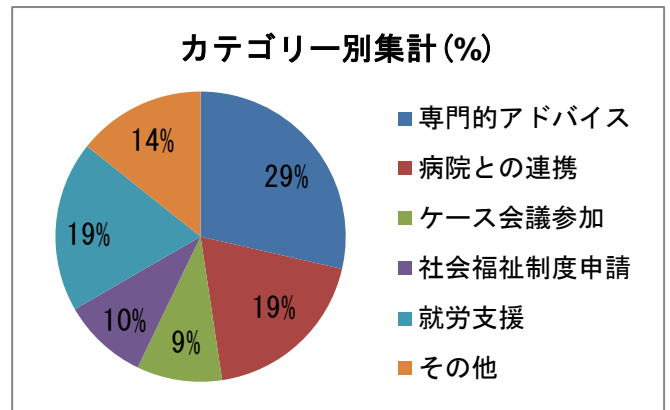
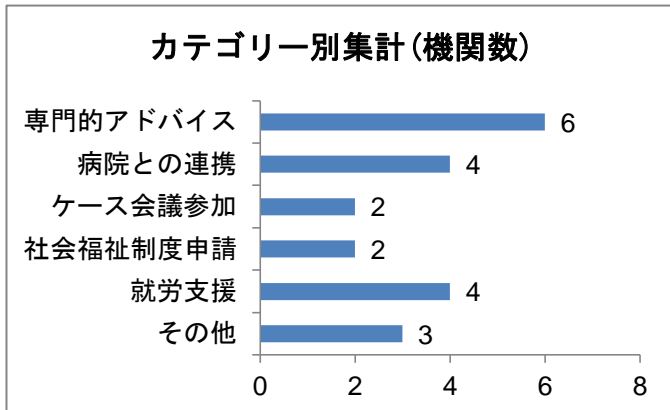
- ・主治医との連携、心身機能の評価、就労指導。
- ・就労施設への紹介のため。障害者手帳取得のため。



- ・就労支援センターへの紹介や、社会福祉制度の本人・家族への説明。
- ・就労支援、転居先(県外の)高次脳機能障害支援センターへの手続き

<その他>

- ・支援センターとの連携が必要と考えたから。
- ・自動車運転について。
- ・高次脳機能障害支援センターが開設するより以前から介護保険サービスで関わっており、居住生活が落ち着いていた。



【利用しなかった理由】

<存在・機能を知らなかった>

- ・センターの事を知らなかった。 12 機関
- ・高次脳機能障害支援センターのことを詳しく知らなかったため。
- ・どのような機関かを理解していなかった。
- ・高次脳機能障害支援センターがどのような機能(支援)をしているのか知らなかったから。
- ・ケアマネとしてどのように活用していけば良いのかわからない。体調のことに関しては主治医に相談してしまうことが多い。
- ・勉強不足で支援センターのこともはっきり知らず、相談してもよいのかもわからなかった。
- ・機関の所在を知らなかった。
- ・高次脳機能障害支援センターの役割がわからないため。
- ・どのレベルで高次脳機能障害支援センターを利用するのかどうか不明なため。
- ・利用方法やどういった場合に利用すればよいのかを知らなかった。
- ・センターの存在がわからなかったことと、引継ぎでの情報や家族からの話で、サービスにつなぐことができた為利用しなかった。
- ・支援センターがあるということを知らなかった。H29.2月本人家族より支援センターに相談したと聞き、初めて知った。
- ・市内にそのようなセンターがあることを理解していなかった。高齢のため介護保険サービスへの依頼が病院の地域連携室から直接あった。
- ・利用経験がなく、どのようなことで利用できるのか把握していないため。
- ・センターの仕組みをよく知らなかった。
- ・どのように利用してよいかわからなかった。
- ・どのような施設か把握できていなかった。
- ・どういう時に、どんなふう利用すればよいかわからないから。

- ・4～5年前のことで、その時点では知らなかったと思う。
- ・高次脳機能障害支援センターの具体的な活動内容の認知不足のため。
- ・センターがどのような機能をするのか知らなかった。
- ・あまり支援センターについて知らなかった。そういう機関に相談する程度の障害を考えていなかった。
- ・電話相談が行える体制があると知らなかった。

<既に支援・相談体制が整っていたため>

- ・40代で脳出血を発症された方で、特定病院で介護保険サービスを既に利用されていた。
家族も若く、知識もあったので手続きは全て済んでいたため。
- ・既に社会福祉制度を利用し、適切に医療の管理も受け、今後は在宅で介護保険サービス利用でよいという形で担当を受けたため。
- ・病院の看護師、PT・STと調整を行った。
- ・市役所と包括支援センターも一緒にケアに加わって下さったので相談できて助かった。
- ・利用しなくても支援体制が整っていたから。
- ・病院連携室のMSWが、制度や就労のことなど相談に応じていた。
- ・支援を開始した時既に介護保険調整済みで定着していたため。
- ・医療機関と相談していた。
- ・脳血管障害による、空間無視や認知機能の低下、意欲のコントロールができないなどのケース、介護保険のサービスを調整し、支援ができていたため。
- ・介護保険サービスで在宅支援が整ったため。
- ・主治医や病院の相談員の方に相談することができていた。
- ・介護保険サービスの事業所の方で、高次脳機能障害を理解していただき、受け入れてもらっていたので、特に利用する必要がなかった。
- ・医療機関入院中より言語聴覚士の方から検査・評価を受けていた。就業については定年となっていた。
- ・既にサービス調整ができており、必要性がなかった。
- ・病院退院後の支援がほとんどであったため、退院時カンファレンスにより、介護保険サービスの利用へ繋げることができたため。
- ・75歳以上の高齢者の方がほとんどだったため、介護保険サービスの利用へ繋げることができない。
- ・専門医、ワーカーなどの関りで、状態が安定したため。
- ・退院後、病院から紹介にて高次脳機能障害支援センターへ通い、リハビリを行っていた。その後介護保険サービスのみ利用している。
- ・介護保険サービスで、訪問看護リハビリなど、医療系のサービスを導入している。
- ・リハビリの継続だけでなく、身体と精神の状態把握と急変時の対応ができるようなプランにして定着しているため。
- ・家族支援者がいた為、居宅として利用することはなかった。

<遠方であったため>

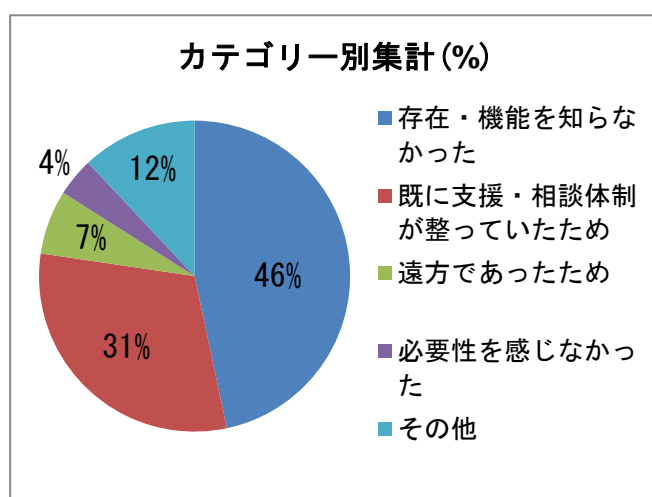
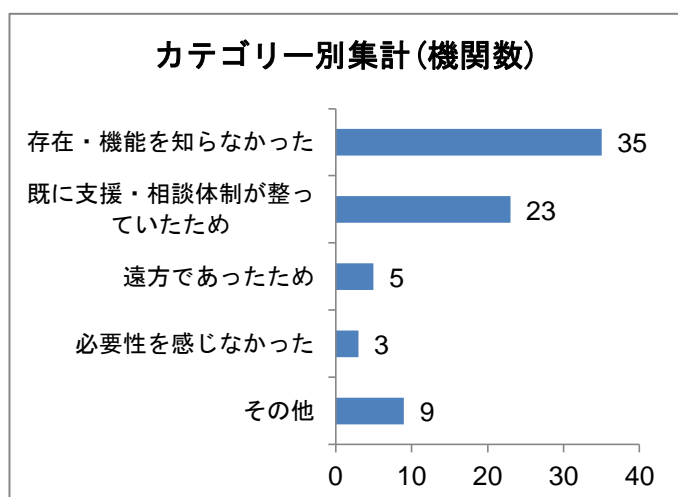
- ・こちらの地域では遠方でもあり、一般的ではない。また、高齢者の方が多く、特に介護サービスで問題ないケースがほとんどであった。
- ・家族には利用を勧めたが、遠いからという理由で利用に至らなかった。
- ・遠方であり、相談のみは利用しにくい。
- ・近くにないから。
- ・主治医の勧めもあったが、遠方などを理由にご家族が拒否された。

<必要性を感じなかった>

- ・必要がなかった。
- ・センターへの相談の必要性を感じなかった。
- ・私自身が関わる前にある程度必要な手続きなどは済んでいて、特に必要なかったケースや、高齢であったりするケースだったため。

<その他>

- ・本人は家族の付き添いで利用されており、家族から情報提供が得られたから。
- ・前任者は対応していたが、その後状態があまり変わっていない。
- ・本人、家族が希望しなかった。
- ・高次脳機能障害教室に参加し、支援の手引きを参照したが、平日なので調整も難しく行けなくなってしまった。
- ・センターから提案してもらった支援内容と本人の思いが違った。
- ・家族が直接センターとのやり取りをされていたため。
- ・退院後、症状が安定していたため。
- ・支援する例として、センター主催の研修に参加した。
- ・利用者家族へ利用を勧めているが、まだ行っていないようである。



(6)高次脳機能障害支援センターを利用せず、各地域単位で高次脳機能障害の方を支援する場合の問題点や課題

- ・診察時、カウンセリングの時間が少ないと訴える利用者があるので、話を聞く時間を少しでも多くとり、不安解消ができれば症状が改善できるのではないかと期待する。
- ・症状がいろいろな形で現れ、個人差があるので、家族の理解が難しく、リハビリによる機能回復の評価がしにくかった。
- ・自身の意識不足があった。あまり高次脳機能障害支援センターの存在が、包括や家族と関わっていても表に出てこない。自身も、元々医療関係の仕事に就いていたので、多少の知識がある故に、連携をとらずに来てしまった。本人の現状を適切に把握し支援していくためにも、今後は連携を取り支援をしていきたいと思う。
- ・高次脳機能障害の家族を抱えている介護者の支援に対しての不安がある。
- ・H21年頃で随分前になるが、入院先の病院からの情報を元にして介護保険サービスを調整した。はじめは訪問看護と利用者間で色々あったが、ヘルパー、利用者、ケアマネの間で情報を密にして対応。現在は特に不都合なくサービス利用できている。

- ・施設入所の場合に敬遠されることがある。
- ・レセプト上リハビリが打ち切りになってしまい、介護保険でのデイケア利用しか手段がなくなるが、高次脳機能障害の方は個別専門リハがもう少し長期で必要になると思うので、医療でのリハ継続に尽力して欲しい。
- ・在宅では困難な(症状的に)利用者が多い。デイなど利用することになるが。
- ・ケアマネ1人での支援は不安があり、市町や支援センターとの連携がないと荷が重すぎると実感した。
- ・主治医に問題点があったときは、適宜確認していたため。
- ・高次脳機能障害は見た目は変わりがなく、普通の生活が送れている方が多いので、周りの方の障害に対する理解がされにくい。また、高齢者ではなく若い方でも障害を持つ病気や事故が原因なので、介護保険サービスを利用する際は理解されない辛さを本人は感じるように思う。介護保険事業者への高次脳機能障害への理解(認知症との違い)が浸透していくよう働きかけを続けることを期待する。
- ・家族が高齢化しており、手続きや相談になかなか行けない。
- ・若い対象者で職場復帰を考えたとき、理解のある場所が少ない。
- ・家族の介護負担が大きい。
- ・主治医から具体的な説明がない場合が多く、本人や家族が高次脳機能障害があるということをわかっていないと具体的な支援がしにくい。
- ・1つのことに対し、こだわりが強く、他者の意見を聞かない。家族関係も悪くなる。
- ・関わる者の病気の理解が必要。
- ・高次脳機能障害は外見から受ける印象と実際の障害や症状、日常生活の困難さにギャップがあり、正確な障害の把握がし辛い。また、周囲の理解も得づらいので広域的なエリアでいいので指導など、学習できる機会は欲しい。
- ・高次脳機能障害からの各障害を、周囲や関係者に理解してもらおう。障害への理解不足から BPSD と捉えてしまう。
- ・介入してもらえると、主治医(医療機関)との連携や情報共有が図りやすい。
- ・本人の意向がわかりにくく、希望が聞き取りにくいいため、支援の方向性が見えにくいのが不安。
- ・病名が明確となった早い時(初期)に、経過を見ながら対処できたらいいと思う。
- ・支援センターの役割、かかわり方の明確化。
- ・家族(もちろん本人も)や関わる機関スタッフが多くいることへの不安と戸惑い。
- ・現在、介護保険サービスを利用しているが、デイやリハビリのスタッフと共に支援させてもらっているので、スタッフの力が大きく助けになっている。
- ・知識を得たいと思うが、仕事で日々いっぱい、なかなか時間が持てない。
- ・認知症の方と同じ接し方で、対応を間違える恐れがある。
- ・この障害の理解を、支援者ができていないと、間違った支援方法になってしまうのではないか。
- ・リハビリ内容の相談や支援。
- ・社会参加までの支援、情報共有。
- ・感情の揺れについていけない時がある。(支援する際の不安)
- ・脳外科受診で事足りるのではないか。
- ・ケアマネのみの相談も受けてもらえるのか。
- ・理解できない事業所や介護職が多いので支援が繋がりにくい。
- ・センターを利用することで、本人の生活上どのようなメリットがあるのかを聞きたい。地域で暮らしていくとなると、本人・家族はもちろん、ご近所の理解も必要だと思う。

- ・介護保険サービスを利用されない場合に、どう支援すればよいかわからない。また、身寄りのない方などの支援が困難であると思われる。
- ・家族の病識が薄いため、助言などを受け入れていただけないことが多い。
- ・サービス事業所の高次脳機能障害の理解が不十分で対応の困難さがみられる。
- ・リハビリや家族への対応が不足してくるのではないかと思う。
- ・社会復帰に向けた(特に就労)対応が不十分になるのではと思う。
- ・就労支援、運転免許の更新など。
- ・就労支援も必要と考えるが、適したところへの紹介、つなげ方が分からない。
担当していた方は40代で、ショートステイ利用は、高齢者の方とは嫌である要望あり、実際受け入れ先があるのか分からない。介護保険サービスのみで支援は出来ない。貴センターにも相談し助言頂きたい。
- ・障害者手帳等の手続きに関しては、入院中に連携室が動いてくれるため、今まではそこに介入する必要がなかった。今後も介護保険利用の方であれば、その中で賄える事が多い。センターにおいて何を支援してもらえるかが分からないため、利用の仕方も分からない。障害支援についての勉強が必要
- ・抑制障害にて、感情を表出し、通所利用など難しいことがある。
- ・注意の障害や空間無視など、歩行は可能でも危険度が高く、本人・家族の理解が薄い。
- ・就労支援。
- ・現在のセンターは医療機関との連携も、就労分野との連携も密に行っていますが、各地域単位になった場合の医療知識や連携においての不安が大きい。
- ・障害に対する理解と対応の大変なこと。認知症の方とは違った難しさがある。
- ・各地域の拠点が分かりやすいと利用しやすい。
- ・家族の戸惑いに対するフォローが難しい。(性格の変化や性的問題など)
- ・支援介入時、高次脳機能障害の確定的な診断がないが、疑われる言動のある方、また主な原因となる脳卒中中等が数年前の過去である、という場合において病前病後の性格変化がつかめない方へのアプローチに苦慮しています。
(支援介入時において、従前から携わっていた医療関係等からは「性格」と受け止められている。)
- ・社会福祉と制度へ申請や適応について支援したことがないため、どのような場合に繋いでいくのか漠然とした不安がある。
- ・支援が困難な方の対応の仕方。
- ・コミュニケーションが上手く取れない事が多い。
- ・こちらが伝えたい事が上手く伝わっていないと思う事がある。
- ・ケアマネ自身がセンターで現在どのような支援をされているのか把握できていない。
利用者が障害受容されず、就業に対して以前と同様の内容固持や意欲を保たれている。その為、現実とのギャップが大きく、支援者との温度差を生じ、満足の得られる支援には至りにくい。
- ・家族への適切な支援や助言を、専門的な方の適切なアドバイスが必要と思われる。
介護職においてのプランが立てにくい状態であり、指導をして頂ければありがたい。
医療との連携が必要であり、家族支援に対して、適切な助言ができなくなると課題があると思われる。
- ・専門的なリハビリ支援。
- ・家族の障害への理解が進まないと、在宅生活は難しいと感じる。また、十分なレスパイトをする必要がある。
- ・高次脳機能障害を発症した年齢が若いケースが多く、社会参加に繋げていくことや、受け入れ機関の充実を希望する。

- ・専門的な知識や情報が得にくい。支援上、困難な局面になった時の専門的な相談が受けにくい。病院との連携で、センターからの情報が多くあるので、センターを利用しないと連携が取りにくくなると思われる。
- ・高次脳機能障害に対して、アドバイスをもらう機会が無くなる。介護保険の枠にとられないアドバイスをもたらす場がなかなかないので、これからも高次脳機能障害がある方の支援の中核として対応して欲しい。(医師、リハ職など高次脳機能障害の知識はあっても、日々の生活の中での対応となると、よく理解している人は少ないと思うので。)
- ・本人が障害を認識できない事による、適切なサービスの介入や関わりが難しい。本人が高次脳機能障害による病識不足が、その他の病気や障害にも影響を与えてしまい、本人からの理解がなかなか得られない。
- ・センターの外部研修などへの講師の派遣を行って欲しい。(各地域の包括支援センターなどが主催する研修など)
- ・家族や地域への高次脳機能障害に対する対応方法や具体的なアプローチの仕方などをもっと啓蒙して欲しい。
- ・在宅支援対象に、専門のリハビリチームを作ってほしい。
- ・情報を説明、理解しやすいものが欲しい。
- ・センターを活用することでどのような利点が見られるのか具体的に教えてほしい。
- ・自分のケースではないが、他のスタッフが担当しているケースで、高次脳機能障害支援センターの方が関わって、就労支援や各手続きをして下さっている事例を見ると、とてもスムーズに支援が進んでいるように思う。やはり専門スタッフが関わっていないケースだと、制度の事や手続きの事も知らずにいる事も多く、受けられる支援・必要な支援に繋がらない事も多くなると思います。
- ・その人に適した制度(若年者の就労支援・精神障害者保健福祉手帳など)の紹介や、手帳の更新などのタイミングに対して理解されていない場合の家人の気持ちの受け入れなどのフォローを期待したい。
- ・徐々に若い年齢の障害の方が増えているように思うが、男性などは行政のサービスを使う事への抵抗があるように感じる。
- ・利用者との関わり方が難しいと感じる。ご家族の精神的な負担も大きく感じるので、家族、介護者へのサポート方法が、費用をかけずにサービスを利用する以外にあると良いと思う。
- ・家族や事業所に対しての病気に対する対応の仕方などのアドバイスを具体的な事例を通して話してもらえると理解しやすい。包括との連携等でもっと身近な所で学びたい。
- ・高次脳機能障害の方は、1人1人違い、個別に対応する事が大切なので、その症状に応じた適切なアドバイスが必要だと思う。センターがあると、本人や家族に適切なアドバイスができると思う。
- ・原因となる疾患があっても、認知症状なのか高次脳機能障害なのか判断に迷う。主治医から「高次脳機能障害」ときちんと説明を受けたケースはない。
- ・福井だけでなく嶺南地域に於いても学習会を開催して欲しい。
- ・京都洛北大原記念病院入院から在宅生活に至る。リハビリ目的で入院していたが、退院後も元々の生活習慣も自己中心的なところがあり、妻へのDV行為も出てきて感情コントロールが上手くいけなくなり困っていた。外部者にも大声で自己主張するようになり、専門病院に入院している。元々、支援センターがあること自体知らなかった。今後、支援センターへの相談などができれば介護者や家族も安心して在宅生活できるよう支援してほしい。
- ・高次脳機能障害の理解がない家族やスタッフが、本人の状態を正しく把握することなくサービスが導入されていくことが不安。
- ・多くの方が高次脳機能障害を正しく理解できるよう活動を続けて行って欲しい。

- ・近くに疾病や症状をきちんと説明してくれる専門家が身近にいて、相談窓口があると良い。
身近に専門的な見地から、親身になって相談に乗ってくれる機関がない。

(7)介護保険サービスにつながらない場合当事者・家族へどのように関わっているのか

- ・既に介護保険サービスを利用されている方達だが、サービス利用されていない場合は自宅訪問し、話を傾聴するように努める、介護施設(デイサービス等)と一緒に見学する事でサービスの利用につながると良いと思う。
- ・幸い家族が医療従事者であったり、理解のある方々で、又、本人の拒否も無くスムーズにサービスに繋がった。利用定着については、特に家族の協力が重要になるので、家族との連携強化に努め、家族に寄り添い共に介護していくという意識、本人に対しても、生活での厳しさを聞き、本人の頑張りを褒め、というように、家族、本人に対し共感し、自身の視点に立った声掛けや支援という事を心掛けている。
- ・現在、担当している方は、60代前半の女性の方。発症前、その方の舅・姑の担当(ケアマネ)をしており、顔見知りの関係であった為、受け入れがすんなりいったのかもしれない(10年近く関わっていた為)。
- ・障害サービス利用と介護保険サービスは制度の違い、利用料の格差があり、負担増になるため、介護保険はなかなか利用してもらえない部分があった。
- ・介護保険に繋がっているが支援が困難。
- ・訪問サービスの対応についてアドバイスした。
- ・認定にひっかからない人たちの対応に困った。
- ・家族はバラバラの生活をしていて、それぞれに話をして何度も足を運び、家族・当事者の信頼を得るまで時間がかかった。ようやくサービスの受け入れを承諾され、訪問看護を開始するも、訪問時に居なかったり、看護師の説明も聞かず、自分の考えで薬を飲むなど、難しい事がいろいろあった。家族も認知症、精神障害があり、家族全員の支援が必要な家でした。
- ・サービス事業者へその方の障害の状況(出来る事、出来ない事)を伝える。また、高次脳機能障害について関わる職員への勉強会や理解を深めてもらえる様、依頼する。カンファレンス時にその都度伝え、定着するように働きかける。
- ・電話、訪問を定期的に行い、本人・家族の状況を把握していく。
- ・これまで担当したケースは全て、介護保険サービスに繋がったが、集団のデイサービスやデイケアでは、個別対応に限界があり、小規模多機能に紹介した事があった。
- ・本人、家族の意思を尊重する。何を勧めるにしても、本人が納得しないことには難しいため、主治医や信頼している人から勧めてもらう。
- ・繰り返し訪問、説明、主介護者にも立ち会ってもらう。
- ・高次脳機能障害で本人自身もちょっとしたことでイライラし、家族にあたる状況があり、集団に入ってサービスを受ける事は困難になっている。ショートステイ利用は環境(冷暖の調整等)的な条件が、ショートステイの方が整っており、さらに個室等で部屋にこもってしまえば、他者との交流も最小限に抑える事ができ利用しやすい。家族の負担軽減になっており、またリハビリにも取り組みやすいので、本人の要望を聞き入れながら、サービス利用の調整を行っている。
- ・自身の考えに固執し、臨機応変に修正する事が出来ず、介護者と野間にズレが生じ、「自分の事をわかってくれない」との思いがある。説得するのではなく、話して傾聴し、少しずつ修正していくようにしている。
- ・病気からの各障害として、関係機関や介護者に理解と対応をしてもらうようにしている。
- ・介護保険利用に繋がっていたため、アプローチ方法がわからない。
- ・少し間をおいてからの追跡、連絡など。

- ・ケアマネとして1人で支援しているという感覚は無く、私自身福祉からのケアマネなので、知識は無く、医療系のスタッフに助けられているので、本人や家族へのアプローチや介入などはスムーズ。
- ・介護保険に繋がらない場合は、相談できる身近なところがあればいいと思います。
- ・サービスの定着は今の所出来ており、逆に少しでもサービスの変化があると情緒不安定になりやすい。紙に記入し、何回も分かり易く説明している。
- ・高次脳機能障害だからと特別介入を難しく感じた事は無い。元々の本人の性格や介護者の性格に影響する事が多いです。
- ・障害サービスの利用を検討。
- ・こまめに連絡をとる
- ・本人の思いは一旦受け止める。その上で自分の考えや、必要な事を伝えるようにする。
- ・本人が興味を持っていることを行っているサービスを探す。
- ・本人はなかなか理解は難しくとも、家族の理解と支援をうながしたり、介護サービス事業所者の理解と、他者とのトラブル対策を提案したり、話し合ったりしている。
- ・今後ケースにより支援センターを利用させていただきたい。
- ・嶺南には通院できる施設が少なく、支援が難しいケースもある。
- ・訪問系のサービスから導入してみたり、根気強く関わりを持つようにしている。また、病院の方から勧めてもらったりもしています。
- ・要支援の認定が出たため、何度か訪問したが、サービス利用に繋がらなかった。本人が妻べったりで、レスパイトの必要性も伝わらず、疎遠になり訪問しなくなった。特養のボランティアも提案したが、本人が気持ち向かず。
- ・ケアカンファレンス等を通して、職域間の連携を密にすることが必要と考える。
- ・現在担当している方は退院後、就労現場(訓練)に一度出ていたが、作業内容に対する物足りなさや、介助する事が多いことで、ニーズと対応不可能な事があり数か月で辞めた。その後介護保険サービスで、デイサービス利用し、リハビリ特化型を3年近く利用している。主治医からは就労の提案があっても、家族や本人は、まだその時ではないと時間だけが過ぎていく。その中で家族が高次脳機能障害支援センターに相談されたことを機に、家族の意識が少し変わってきました。Q7の主旨とズレますが、デイで受け身期間が長くあり(本人さんは居心地は良いようですが)、就労への一歩が出しにくい状況になる前に、関係機関と連携を取り方向性を共有する事が必要だったと感じています。
- ・病識の認知度も低い様に思う。本人へ理解を求める事が難しい場合は家族や関係者に丁寧に説明している。家族も高齢で、あまりたくさんの情報を伝えても理解が難しいと思われる場合には、ある程度こちらで選定して、本人・家族になるべく合ったプランニング、情報提供を心掛けている。
- ・訪問リハビリは受け入れ拒否が少ない様に感じるので、導入し、リハスタッフと相談しながら、本人、家族に関わっている。
- ・通所職員にも、出来ない事や、危険度を説明し(詳しく)本人や家族が不快に思わず安心して出来るよう努める。
- ・保険者、包括に情報を伝え、ケアマネが入れなくても支援が切れてしまわない環境を作る。
- ・まず、家族にしっかり聞き取りをする事を心掛けている。何が困っていて、何が大変なのかを聞き、家族がどうすれば在宅で介護していけるかを一番に考えている。しかし、なかなか上手くいく事は難しく、日々悩んでいる所。そんな中、やはり専門の方の話を聞くと、家族も支援者も安心できる事が多くある。
- ・訪問看護の導入を勧め、関わってもらおう。
- ・出来る限り本人の状態に合うサービスをすすめるが、ダメな場合難しい。

- ・ショートや通所で、性的欲求が抑えられない方は、同姓の職員のみの方の利用、もしくはたくさんの方の職員で対応してもらえるようお願いしている。
- ・何度もご本人やご家族と面談し、話を傾聴していく。
- ・ご本人の理解力に問題があるように思うので、筆談したり、分かり易い言葉を使うようにしている。
- ・ご家族が不満をため込む事が無い様に、話を聞くようにしている。
- ・ご本人、ご家族と時間をかけて面談し、困っている部分から支援していく。
- ・高次脳機能障害支援センターの方に、自宅を訪問して指導してもらった。家族は理解でき、STの再度利用をしてもらえるようになり、少しずつ安定してきている。今後は経済面についても考えて、家族と一緒に在宅生活が順調に進むよう、努力していきたい。
- ・ライフサービスなど、通所系サービスを利用しても、ささいな事を被害的に受け取り、すぐ嫌になって辞めてしまう。
- ・本人さんの話を傾聴、無理強いせず、訪問系サービスのみ利用している。
- ・本人の受け取り方と事業所の思いが食い違う。家族、事業所側にそのことをしっかりと伝え、本人の性格(高次脳機能障害?)を踏まえての対応をしてもらっている。
- ・当事者・家族への訪問や、面接を行い、また医師へも相談している。
- ・担当した方は、高齢世帯(70代夫婦)で、要介護4だったので、初めから在宅介護は難しいと関係者は判断していた。主介護者(妻)の強い希望で、在宅介護を実施したが、妻が障害に対してなかなか理解できず、出来ない事を無理にさせようとして、二人が共倒れになるなど、難しい場面がみられた。結局3か月程で施設介護に切り替えたが、家族の障害の理解が不可欠だと感じた。
- ・高次脳機能障害支援センターの方も交えて、本人や家族へ相談・調整している。
- ・サービス事業所に、家族とケアマネで本人の症状や特徴を繰り返し説明する事で、本人についての理解を含めた。
- ・デイやショートでは、本人が過ごしやすい環境作りを工夫した。
- ・実際は、介護サービスにつながらない場合は、ケアマネとして関わりが薄くなってしまう。障害者サービスの紹介、障害者担当の社協の方へつなぐなど、ケアマネ以外にアプローチしてもらえる方を巻き込んで情報を共有する。
- ・定期的に家族に連絡したり、訪問する事によって生活全体の評価を定期的に行っている。
- ・ケアマネからも高次脳機能障害へのアプローチや対応方法などを家族にしっかりと伝えられるように、居宅内での勉強会の開催や事例検討等を定期的に行っている。
- ・本人、家族への信頼関係をつくる事に重点を置き、危険や生活面での不安定さが表に出た時にすぐ対応できるような体制作りをしておく。
- ・介護保険事業所であり、基本的に対象者以外の支援を行う事はない。相談があった場合は専門医の紹介や地域医への相談を勧めている。
- ・サービス事業者への事前情報提供、サービス担当者会議等で、他者との考えられるトラブルを未然に防ぐ対応を練る。家族への病気の理解がしやすいように説明していく。
- ・利用定着が困難な場合に、特にセンターに相談すると、よい助言を得られると考える。今後そのような時に利用したいと思います。
- ・Q6で答えたように、特に男性はプライドが高く、介護保険は年寄りを使うものと思い込んでいる。何度か説得し、自由に出入り出来たり、短い時間でのサービスを行ったりしている。

- ・高齢の方との関わりなので、脳血管疾患からの高次脳機能障害をおこすケースが殆どで、認知機能の低下があっても、それは起こりえるものとして対応している。ただ介護者の理解がないと、やはりすぐに施設入居の言葉が家族から出る。少しでも長く在宅で生活をとと思うが、サービス調整だけでは限界があり、家族へのアプローチが一番大切だと思う。
- ・90歳近くの母の介護をされていた70代の方が発症したケースで、結局その方の夫が、義母と妻を介護する事になった。泊りのできる小規模を紹介したが、本人のまだらで、思い込みが激しい部分が、在宅での生活を困難にし、入所となった。
- ・今迄の利用者は介護サービス利用に繋がり、問題が起きた時には、その都度家族や事業所と対応を相談していた。
- ・今迄担当してきた高次脳機能障害の方は全員介護保険サービスを何かしら利用されている。なかなか本人と家族のニーズが合わない事もあるが、本人が興味のある事、ニーズを引き出しアプローチするよう工夫している。
- ・情動障害で感情をコントロールできず、欲求が抑制されずに行動し、在宅生活が困難になった場合、介護者への精神的なフォローが必要になった場合に、相談できる機関を近くで作って欲しい。
- ・周囲の方々や関係機関の連携。
- ・本人と対面し、まずは訴えを全て受容後、丁寧に説明する。本人の意思に沿えることは沿って、できないことは説明し、どうするか本人の意思を問う。本人が納得した処で、目の前で話し合った内容を記録し保存する。度々記録したものを取り出し説明すると納得しやすい。書いたものを目に見える形で貼り出しておく。度々笑顔など良い印象で繰り返し刷り込みのように伝えていく。

7. 考察・調査結果の活用

(1)高次脳機能障害の認知度

98%が高次脳機能障害を知っていると回答しており、居宅介護支援事業所(ケアマネジャー)の中での高次脳機能障害の認知度は高いと言える。今までの普及・啓発活動の一つの成果と考えられる。

(2)高次脳機能障害の方に対する支援経験

支援経験あり 63%、支援経験なし 37%。支援経験人数は、1～5 人が 64 機関(81 機関中)と大半を占めている。ここから、支援経験のある機関は多いが支援経験人数は少なく、大半の機関が高次脳機能障害の症例を通して支援手法を学び、支援手法を定着させることが難しいのではないかと考える。よって、支援手法を定着していく方法を検討する必要がある。

また、支援経験人数における第 1 号被保険者(65 歳以上)と第 2 号被保険者(40～64 歳の特定疾病対象者)の割合は 4:1 であり、第 1 号被保険者の割合が多い。しかし、約 1/4(23%)を占める第 2 号被保険者は、就労年齢であることから、就労支援を念頭においた支援を行う必要があると考えられる。

(3)支援を行った方の紹介元

高次脳機能障害支援センター3%、病院 64%(入院中 31%・退院後 33%)、行政機関 5%、当事者・家族から直接 15%、その他機関 13%となっており、97%が高次脳機能障害支援センターを介さずとも居宅介護支援事業所に繋がっていることが分かった。つまり、高次脳機能障害支援センターが相談窓口にならずとも、地域の居宅介護支援事業所に当事者・家族が繋がる土壌が築かれつつあると考えられる。また、多くが病院から居宅介護支援事業所に繋がっているようであり、医療関係職と居宅介護支援事業所との連携の流れは比較的構築されているように思われる。

よって、居宅介護支援事業所に対して支援手法の定着を図ることで、「地域単位で支援できる体制」へと繋がるのではないかと考える。

(4)今まで行った支援内容

支援内容として回答が多かったのは順に、サービス利用について 51%(サービス利用調整 24%・サービス利用定着支援 27%)、定期的な面談・電話連絡での状況確認 19%となっており、以上が居宅介護支援事業所で比較的対応可能な支援内容と考えられる。

一方で支援内容として回答が少なかったのは、就労支援 4%(専門機関への紹介のみ 2%・専門機関とともに支援 2%)、医療機関への受診調整(診断・評価、リハビリ目的)11%、社会保障制度の紹介・対応 12%となっている。また社会保障制度の紹介・対応の内訳をみると、自立支援医療・障害者手帳・障害年金についての紹介 8%、その手続き援助 4%、自賠責保険・労災・傷病手当金・失業手当についての対応は 0%であった。高次脳機能障害をもつ当事者・家族にとって必要な社会保障制度に対して、居宅介護支援事業所では対応が難しいことが窺え、今後知識の拡充に向けた働きかけ(研修など)が必要と考える。

また、支援を行った高次脳機能障害者内の第 2 号被保険者の支援で「困ったことがあった」と回答している機関は 75%であり、困り感の内容は、社会福祉制度の相談・対応(その他の社会福祉制度含む)31%、就労支援(連携の取り方、支援の進め方など)24%、どのような視点・流れで支援を行えばよいか分からなかった 15%の順で多かった。よって、この結果を踏まえても、居宅介護支援事業所に対して、社会福祉制度や就労支援についての知識の拡充や、高次脳機能障害者を支援する際の流れや各医療・支援機関との連携の取り方について普及・啓発を図る必要があると考える。

(5)支援を行う際の高次脳機能障害支援センター利用の有無

利用した 20%、利用しなかった 80%と高次脳機能障害支援センターを利用せずとも支援が行われているケースが大半であることが分かった。

高次脳機能障害支援センターを利用した際の利用目的は、カテゴリー別集計より、「専門的なアドバイス」が 29%と最も多く、高次脳機能障害支援センターの役割として、支援を行う上での専門的なアドバイスが求められていることが分かる。よって、地域への支援手法の還元を図ることは、居宅介護支援事業所のニーズに沿った役割になると考える。

また、利用しなかった理由は、「存在・機能を知らなかった」が 46%と約半数を占めており、居宅介護支援事業所への高次脳機能障害支援センターの存在・機能の啓発は十分に行えていなかったことがわかる。よって、居宅介護支援事業所に対して、高次脳機能障害支援センターの存在・機能を啓発していく必要があると思われる。

(6)高次脳機能障害支援センターを利用せず、各地域単位で高次脳機能障害の方を支援する場合の問題点や課題

意見を参考に、今後の支援体制強化を図る。

(7)介護保険サービスにつながらない場合当事者・家族へどのように関わっているのか

意見を参考に、今後の支援体制強化を図る。

平成 30 年 8 月

編集・発行

福井県高次脳機能障害支援センター

福井県福井市新田塚 1-42-1 福井総合クリニック内

電話：0776-21-1300 内線 2540

FAX：0776-25-8264

E-Mail：fukui-koujinou@kve.biglobe.ne.jp